

平成16年度 教師海外研修（派遣国： マラウイ ） 実践報告書

1. タイトル 世界を見つめ、自らの生活を切り開いていく子の育成  
 == 4年生総合学習「マラウイっ子になろう」の活動を通して ==

2. 氏名 榊原喜子

学校名 愛知県知多郡武豊町立武豊小学校

担当教科

3. 実践教科 総合的な学習の時間

時間数 40（行事3を含む）

4. 対象生徒・学年 4学年

対象人数 114人

5. カリキュラム案

(1) 実践の目的

- ・世界には、たくさんの国、いろいろな人種、民族が存在し、言葉、文化、習慣にもそれぞれ大きな違いがあることを知り、その違いに興味をもち、それぞれの良さを認め尊重できる資質を養う。
- ・外国の人々のくらしの疑似体験や交流活動を通して学んだことから、自分の生活をふり返し、よりよく生きようとする姿勢を育てる。

(2) 授業の構成案

| 時限       | ねらい   | 方法・内容   | 使用教材                                   |
|----------|---|---|--|
| 1, 2     | テーマ:マラウイについて知ろう<br>ねらい:マラウイを知り、興味を持つ。                                   | (1)アフリカについてのイメージを話し合う。<br>(2)マラウイの自然や人々のくらしについて話を聞く。              | (1)マラウイで撮った写真                          |
| 3, 4     | テーマ:やってみた<br>いなこんなこと<br>ねらい:これからの活動の構想をたてる。                             | (1)マラウイの人々のくらしでやりたいことを話し合う。<br>(2)話し合ったことから、活動の計画をたてる。            | (1)1, 2, 時で使った写真                       |
| 5, 6     | テーマ:マラウイ気分で<br>買い物ゲームをしよう<br>ねらい:マラウイの物価を知り、日本との違いに気づいてこれからの学習の基礎知識とする。 | (1)マラウイで購入してきたものを見て、その値段をあてる。<br>(2)日本との物価の違い、場所や物によって値段が違うことを知る。 | (1)シテンジェ、シマの粉、豆、太鼓、木彫りの象、市場の写真、床屋の写真   |
| 7, 8, 9, | テーマ:マラウイのゴムとびをしよう<br>ねらい:マラウイっ子の創意工夫を学ぶ                                 | (1)マラウイっ子のゴムとびのひもは何でできているか話し合う。<br>(2)作り方を考える。<br>(3)ひもを作る。       | (1)ゴムとびの写真<br>(2)スーパーの袋<br>(3)ゴムとびのビデオ |

|             |  |  |   |
|-------------|--|--|---|
|             |  | (4) ゴムとびをして日本のものと比べる。  |   |
| 10、11       | テーマ:マラウイのレストランごっこをしよう。<br>ねらい:マラウイの習慣を知る                 | (1)レストランの写真を見て何をしているところか話し合う。<br>(2) レストランごっこをする。<br>(3)感想を話し合う。                 | (1)レストランの写真<br>(2)やかん、洗面器                                     |
| 12,13,14、   | テーマ:水道生活 VS水くみ生活<br>ねらい:水運び体験をし、水道生活と水くみ生活の良い点 良くない点に気づく | (1)一日水道を使って生活し、どのくらい水を使ったか調べる。<br>(2)水運び体験をする。<br>(3)くんできた水で一日生活し、どのくらい水を使ったか調べる | (1)井戸から水をくんで運んでいる写真<br>(2)バケツ、たらい、コップ<br>(3)グラフ用紙             |
| 15,16,17,18 | テーマ:マラウイのサッカーボールを作ろう<br>ねらい:マラウイっ子の創意工夫を学ぶ               | (1)マラウイの青年海外協力隊からのメールを読み、ボールの作り方を<br>知る<br>(2)材料の集め方を話し合う<br>(3)ボールを作る           | (1)マラウイのサッカーボールの写真<br>(2)マラウイの青年海外協力隊からのメール<br>(3)ビニール袋、薪、タコ糸 |
| 20、21       | テーマ:マラウイサッカーに挑戦<br>ねらい:マラウイっ子のサッカーボールでサッカーをし、感触を味わう      | (1)マラウイサッカーボールでサッカーをする<br>(2)感想を話し合う   | (1)手作りサッカーボール   |
| 22、23       | テーマ:マラウイの歌を歌おう<br>ねらい:マラウイの歌のリズムやチェワ語の響きを楽しむ             | (1)ビデオを見て、何語で歌っているか話し合う<br>(2)なんとやっているカリスニングで聴き取る<br>(3)ビデオにあわせていっしょに歌う          | (1)村人が歌っている場面のビデオ   |
| 24、25       | テーマ:シマを作ろう<br>ねらい:マラウイの主食作りを体験し、味を知る                     | (1)シマ作りの写真を見て、思ったことを話し合う<br>(2)シマを作る   | (1)シマを作っている写真<br>(2)シマの粉、トマトソースの材料、野菜ソテーの材料                   |
| 26、27       | テーマ:マラウイの友達に手紙を書こう<br>ねらい:マラウイっ子を身近に感じ、友情を深める            | (1)手紙を書く   | (1)手紙用紙   |
| 28          | テーマ:フェスティバルの計画をたてよう<br>ねらい:学習して考えたことを他に発信する計画をたてる        | (1)学習してきたことをどのような方法で発信するか話し合う<br>(2)準備と当日の係分担を決める                                |   |

|                                  |   |   |                                     |
|----------------------------------|---|---|-------------------------------------|
| 29、30、31、<br>32、33、34、<br>35、36、 | テーマ:フェスティバルの準備をしよう<br>ねらい:フェスティバルの準備をする       | (1) マラウイクイズをつくる<br>(2) マッシュルームハウスをつくる<br>(3) 買い物ゲームの準備をする<br>(4) 水運び体験コーナー、マラウイボールでリフティングコーナー、マラウイゴムとびに挑戦コーナーを設ける<br>(5) マラウイレストランの準備をする<br>(6) マラウイの歌コンサートの練習をする | (1) 今までの学習で使った物、作った物<br>(2) わら、段ボール |
| 37、38、39                         | テーマ:フェスティバルをしよう<br>ねらい:学習したことを発信しよう           | (1) 参観者に自分たちが学習したことを紹介する  |                                     |
| 40                               | テーマ:自分たちの生活をふりかえろう<br>ねらい:自分の生活を見直し、向上させようとする | (1) マラウイの人々から学んだことを話し合う   |                                     |

## 6 授業の詳細

### 1, 2時

学年全クラスの児童にマラウイで撮ってきた写真をOHCでスライドショーのようにしてマラウイの自然や人々のくらしを紹介した。(資料1~24) 子どもたちにとっては、見るもの聞くものすべてが珍しく、またアフリカに対してもっていたイメージと違っていたところもあり、興味津々で2時間聞き入っていた。会場には、マラウイの品々を展示しておいたが、お話の流れの中でそれらを取り込んでいくと話全体に、臨場感をもっと出たのではないかと思う。

### 3, 4時

前時の話を聞いて自分も実際にやってみたいと思うことを話し合った。マラウイっ子のサッカーボールを作ってみたい、シマを作って食べたい、マラウイっ子のゴムとびをやってみたい、木彫りの象をつくってみたい、文通をしたい、マッシュルームハウスに入ってみたい、マラウイの歌を歌いたい、頭に水をのせて運んでみたい、シテンジェをはいてみたいなどがでてきた。これらの願いをもとに活動を構成していった。

### 5, 6時・・・(授業の様子・資料26)

マラウイで買ってきたいろいろなみやげものを実際に手にとってその値段を推測するゲームをした。食品などは、市場やスーパーマーケットの売り場の写真で示した。(資料16~21) 子どもたちからは「観光客が買うようなのれんは、マラウイの人の一ヶ月分の給料でも買えない」などの感想が出た、物によって、場所によって物価に違いがあること、また、日本とは物価がまったくちがうことなどに気がついた。

### 10, 11時・・・(授業の様子・資料28)

マラウイのレストランの写真(資料22)を見て、日本のおしぼりのサービスとちがうことを知ると、子どもたちは、おもしろそうなのでやってみたいと言いだした。そこで、やかんに入った水と洗面器でレストランごっこをした。すると、おしぼりよりずっと気持ちがいいこと、手がきれいになることに気がついた。「アフリカの人たちは

汚い手のままでものを食べると思っていたけど、ほんとは日本よりきれいな手で食べている」という感想が出た。子どもたちがもっていたアフリカへの偏見が一つなくなった場面であった。体験から感じることの大切さ、確かさを実感した。

12, 13, 14時・・・(授業の様子・29, 30)

一日水道を使って生活し、どのくらい水を使ったか調べた。翌日はマラウイの人のように(資料23)外の水道から水運びをし、その水を給食の手洗いや掃除などに使って一日過ごした。水くみ体験からはそのたいへんさを学び、自分たちが水道を使って、普段とても便利な生活を送っていることにも気づくことができた。同時に水道生活では、水のありがたさをあまり感じないため、つい無駄遣いしてしまうことにも気がついた。水も資源も、国によって使い方がこんなにちがうことに初めて気づき、地球規模でものを考えることの大切さも学んだ様子であった。

7, 8, 9時・・・授業の様子・資料27

15, 16, 17, 18時・・・(授業の様子・31~32)

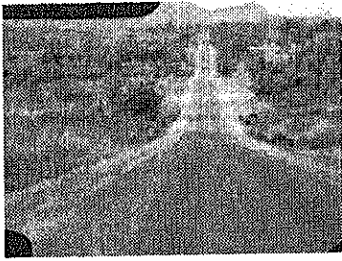
ゴムとびのひもは、写真をよく見て(資料14)作り方を考えた。スーパーの袋を細く切って、こよりのようにしたものをつなぎあわせてひもを完成させた。子どもたちはスーパーの袋たった2枚でできたことにびっくりしていた。また、サッカーボールは、(資料13)マラウイでお世話になった青年海外協力隊の清水隊員にEメールを送り、作り方を教えていただいた。清水隊員が現地の子どもの聞いて情報を収集したところによると、マラウイボールは、ビニール袋をまるめたものを火の中にほうりこんで、表面を溶かし、とろけているところで木などでたたいて丸く成形するらしい。子どもたちは、予想外の作り方にびっくり、ますます興味がわき、雰囲気盛り上がった。みんなで話し合い、全校から給食のパンの袋を集める作業から始めた。火の中に入れる作業では、初めて体験するワイルドでエキサイティングな活動に、どの子ども夢中であった。それと同時に、火をたくことのたいへんさも学び、ふだんスイッチ一つで煮炊きができることのありがたさにも気がついた様子だった。以上の活動から、子どもたちは、「自分たちは、普段一万円以上もするゲーム機で遊んでいるけど、遊びってほんとはそんなにお金をかけなくてもできるんじゃないかな」「ボールを作るだけでも楽しかった」「大勢で遊べて楽しかった。ゲームは2, 3人でしか遊べない」「マラウイの子は捨てるようなものを材料にして、工夫して遊び道具を作っちゃうから賢い」などの感想が出た。また、清水隊員にかかわっていただくことにより、子どもたちは、海外で協力隊として、人々のために活躍している日本人がたくさんいることも初めて知ることができた。子どもたちは一様にJICAや協力隊の支援活動に感心していた。

22, 23時・・・(資料41)

マラウイで撮影してきた(資料3, 25)村人や中等学校の生徒の、歌のビデオを聴いて、歌詞を聴き取る作業をした。子どもたちの素直な耳は、チェワ語をよく聞き取った。子どもたちは、マラウイの人々の歌の上手さに感心し、自分たちも歌えたらという憧れをもっていた。この気持ちが毎朝、朝の会で歌う原動力となった。特に村人が農作業時に歌う歌は、ジベジベの歌と名付けてよく口ずさんでいた。フェスティバルの準備作業をするときにも誰からとなく歌い出し、いつの間にか、マラウイで見た光景と同じように、みんなで歌いながら作業しているという具合であった。

7. 資料

1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



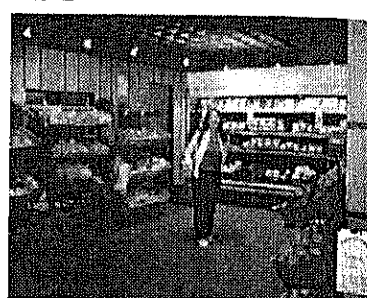
19



20



21



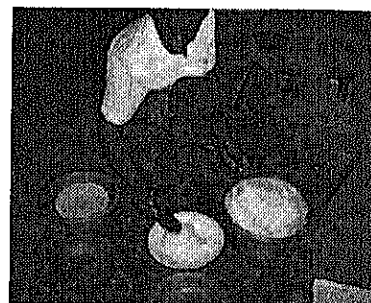
22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34 シマ作り



35 シマ作り



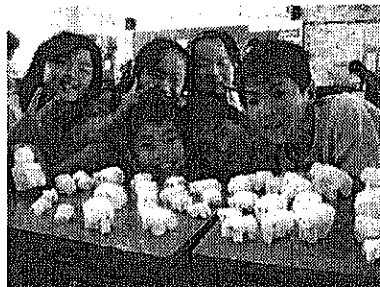
36 マラウイの家作り



37 マラウイの家完成



38 発泡スチロールで木彫りの象作り



39 フェスティバル



40 フェスティバル



41 フェスティバル



42 フェスティバル



平成16年度 教師海外研修（派遣国：マラウイ）実践報告書

1. タイトル マラウイに行つて一言葉が通じなくてもコミュニケーションはできるー

2. 氏名 鈴木 富雄

学校名 名古屋市立中央高等学校昼間定時制

担当教科 国語

3. 実践教科 コミュニケーション・新発見

時間数 全体21時間の内2時間

4. 対象生徒・学年 高校生1年次から4年次

対象人数 23名

5. カリキュラム案

(1) 実践の目的

- ①言葉がうまく通じない中で、私自身が、マラウイの人々とどのようにコミュニケーションをとろうしたか。
- ②現地の子供たちが今あるもので工夫して遊んでる様子を紹介し、実際にビニールの袋でサッカーボールを作ってみる。

(2) 授業の構成案

| 時限 | テーマ・ねらい  | 方法・内容   | 使用教材                             |
|----|--|---|----------------------------------|
| 1  | マラウイの人々の暮らしと子供たちの様子。マラウイの人々とどのようにコミュニケーションをとろうしたか。 | ① パワーポイントでマラウイの概略説明<br>② スライドショーで現地の様子を映写<br>③ 現地の人々とのコミュニケーションギターを使って歌う。<br>④ 現地の人々とのコミュニケーション手品 | ① マラウイの写真<br>② ギター・楽譜<br>③ 手品の道具 |
| 2  | 子供たちが今あるもので工夫して遊んでる様子を紹介し、実際にビニールの袋でサッカーボールを作ってみる。 | ① 子供たちがビニール袋で作ったサッカーボールで遊んでいる写真やビデオの紹介。<br>② グループ分け(3人ずつ)<br>③ サッカーボール作り<br>④ できたサッカーボールで遊んでみる。   | ① ビデオテープ・写真<br>② ビニール袋・ひも・はさみ    |

以下、教師海外研修マラウイの授業だけでなく（これについては先日1/23の「実践報告フォーラム2004」で発表済み）私の今年度行った、総合的な学習「知のトライアングル（トライ）」の中の「コミュニケーション・新発見」の一年間の活動をまとめる形で報告したい。



1.本校の総合的な学習の時間「知のトライアングル(トライ)」の概要

隔週水曜日3・4限の2時限を使って行っている。

15の講座から生徒は、興味・関心に従って1講座に希望登録する。

15の講座名・ご近所まちかど考現学・作家作品研究・パソで解決・こころのしくみ

・囲碁入門・哲学的に考えよう・飛行機を飛ばそう・クリエイティブスポーツ・廃品クリエイターをめざそう・自分で作る旅・森に行こう・和の心・ソウゾウする・映像作家への道

・そして私の担当している「コミュニケーション・新発見」

2.トライ「コミュニケーション・発見」の取り組みの記録 受講生徒23名

トライ 第1回 4月9日(金) トライ オリエンテーション

トライ 第2回 4月21日(水) テーマ 「私の紹介・非言語コミュニケーション」

\*私の紹介(私はこんな人!あなたはどんな人?)

(まず自分との対話からコミュニケーションが始まる。)

(しっかり伝え、しっかり聞く。①伝える力②聞く力③考える力)

①自分が呼ばれたい名前②自分の好きなどころ③他人からは〜と見られたりしますが、本当は〜です。④私のお薦め

\*非言語コミュニケーション(コミュニケーションは何のため?)

①バースデーライン②組じゃんけん③コミュニケーションを絵にしてみる。グループディスカッション

トライ 第3回 5月26日(水) テーマ 「二人で作った絵を物語にする」

①好きな動物②好きな食べ物③形にならない線④それを形にする⑤丘の上にある一本の木 ④そこに人が住んでいる家を書く。→その絵をもとにお話を作る。

生徒感想(第2回・第3回合わせて)

・普段普通に生活してたら、話すこともない子達と話しをしたりして、その人と自分の考えをあわせたりすると、色々な考え方があって思ったりするし、少しずつだけど色々な人と話しをすることができたりするのは楽しいなあと思いました。

・最初の授業で、思っていたより皆あだ名で呼びあいたいんだなあと感じた。

誰と話しても楽しかった。2回目の授業は、コミュニケーションがとれ、尚且つ楽しかった。思っていることの違いも、絵にすると、けっこう出てくるんだなあ実感。

でも、さほど違うということは意識されなかった。(いい意味で)

・ずっと笑いっぱなしで楽しかったです。

・コミュニケーション新発見の授業を受けて、色々な人と話しができてとても楽しいです。

コミュニケーションの仕方は、色々あるんだなあと思いました。

これからも、いろんな人と話しをしてコミュニケーションをしてみたいです。

トライ 第4回 6月16日(水) テーマ 「感覚の一つを喪失したとき。」(自分一人ではできないこと)

①「一人が目隠しをして一人が誘導して校内を歩き、5つの物をさわってなんであったか当てる。」

②「グループで新聞紙を使って切り絵を作る」しゃべれないとして クジラ・かめ・ぞう・キリン・うさぎのどれを作るかを各自決め順番に新聞紙を切り抜いて作っていく。さて何

ができるか。作る中で何を感じたか。

・何かを失うことで見えてくるコミュニケーションの大切さが印象的でした。コミュニケーションには、日々の生活をより楽しく豊かにするものと、生きていくために必要なものがあるのかなと思いました。目かくしをしている時に誰も何もしてくれなければ、自分一人をたよってがんばらなければいけなくなってしまいます。でも、ただ助けてくれるだけのコミュニケーションではお互いにつらいものになるような気がします。

全てのコミュニケーションが、生活を楽しく豊かにする方向になったらいいのかなと感じました。

トライ 第5回 6月30日(水) テーマ 「フォト・ランゲージ」

どこかの国の写真を5枚順番に見て、何をしているところか、日本と同じ所、違っている所をグループで考える。そしてどこの国か当てる。各グループ発表する。

\*夏休みの課題

「今年の7月～8月に起こった出来事の中に見られるカルチャーショックについて」レポートを書く。

トライ 第6回 9月8日(水) テーマ 「ニジェールってどんな国」 JICA 青年海外協力隊石井里絵さんとムーサ・スーレさんをお迎えして」

生徒感想

・自分の知らない国のことをその人の体験を通して聞いたりするのは、普通にその国の話しを聞くよりも分かりやすく、興味を持って聞くことができよかったです。

あと、料理を作ったりするのも楽しかったし、食べたことのないようなものを食べたり飲んだり出来てよかったです。

・石井さんやムーサスーレさんの話を聞いて、住んでいる環境が全く違うんだなあというのがよくわかりました。

ムーサさんの顔を見ていると本当に自分の国が好きなんだなと感じました。

・異国の文化を身近に感じる事ができてよかったですと思います。

他の授業だと長く感じる一時間半があつという間で、もっと話が聞きたいと感じました。

・アフリカの国の文化にはいままでふれたことがなかったので、見るもの全部がめずらしく、新鮮だった。

食事でも食べられるかどうか心配だったが、意外とごはんがおいしかった。

・Nigerの言語は聞いた事がなかったので、とても新鮮さを覚えました。そしてNigerの食事等も作る事ができとても楽しかったです。良い思い出になりました。

・なごやかな雰囲気です授業をうけることができました。

ニジェールだけでなく、アフリカ全土のことをあまり知らなかったもので、今回分かりやすく教えていただき、勉強になりました。もう少し積極的に参加すればよかったと反省するとともに、サラダづくりなどを通して、ほんの少しだとしてもムーサさんとコミュニケーションをとることができてとてもよかったです。青年海外協力隊にも興味がわきました。

トライ 第7回 11月17日(水) テーマ 「キューバ音楽のリズムと踊り・サルサ」

パーカッション奏者 藤原憲一さん・サルササークル 伊藤温子さんをお迎えして

・あまり知らない音楽で、明るいから「オーレイ！」なんていう感じなのかな?と思っただけ普通のダンスみたいで、文化っていうのは、どこも似てるんだなと思いました。

とても元気になれた2時間でした。

・すごくいい時間を過ごせました。たくさんの楽器と音楽にかこまれて、心がワクワクと  
いった感じです。サルサのステップが、基本は実はシンプルでなじみやすいものだったの  
が驚きです。(でもあまり踊れなかった…)

楽しくてとても良かったです。

・異文化コミュニケーションをしたという感じは何故かあまりしませんでした。それだけ  
ナチュラルに体験できたのでしょうか。

・リズムをとるのが意外にムズカシくて大変でした。でも楽しかったです。

キューバ最高~~~~~!!!

・音楽はクラベの一定のリズムでかんたんだった。

ダンスは不器用なのでいまいちだった。

すごいつかれた。

・リズムをとるのが難しく、普段触れられないことにふれられて楽しかったです。

トライ 第8回 12月15日(水)「マラウイに行って-言葉が通じなくてもコミュニケーション  
はできる」鈴木富雄(本来は、ニジュールの授業に続けて10月20日に行う予定だ  
ったが、台風で延期)

#### 生徒感想

・小さなころ、セロテープだけで野球ボールぐらいのボールを作って怒られた事を思い出  
しました。日本人の私にも、マラウイの子供みたいに何でもおもちゃにできるチャレンジ  
ャー精神があったんだな…と感動しました。多分それが全世界共通の子供の姿なんだと思  
いました。

私たちは物にあふれた中で生きているけど、与えられたり買ったりした物ばかりを求め  
ないで生きたいと思いました。

・やっぱりアフリカ(発展途上国)の子どもたちは明るくていい笑顔をしているなあと思  
いました。元気で、がんばっている子たちや人々のすごさをあらためて感じます。

・マラウイという国について、私はほとんど知りませんでしたが、今日のトライで現地の  
人の生活について、少し知ることができました。ビニールのサッカーボールは、写真で見  
る様にはなかなかうまくいきませんでした。

・マラウイの人の生活とかを少しでも知れてよかったです。サッカーボール作りはがんじ  
ょうにするのも丸い形にするのも難しいからマラウイの子どもはすごく器用なんだなあ  
と思った。

・マラウイの子どもたちはたくましいと思いました。

・サッカーボールがうまくできなかつたからマラウイの人はすごいなあと思った。

・電気がほとんど通っていないことにびっくりしました。ものがそろっていないくても、子  
ども達やみんな、とても楽しそうに生活しているなと思いました。

ボールはなんかうまくできなかつたけど、すごいなと思いました。

・マラウイの現状を知れて面白かった。

・うちのグループのサッカーボールはあまり上手く出来なかつた。マラウイの人たちは、  
こういう物で遊ぶんだなあと思った。思ったより楽しいものだと思う。

・マラウイの生活を見て日本とはだいぶちがうんだなあと思った。

サッカーボールを一つ造るのも重労働だと思いました。

- ・サッカーボール作りが楽しかったです。
- ・サッカーボールは、うまくできと思う。

写真のボールのようにはいかなかったけど、楽しかった。

トライ 第9回 1月12日(水) テーマ 「お金って?コミュニケーション?松井・イチロー感想」 本校教員(コミュニケーション・新発見をともに担当) 河村宣嗣

生徒感想

- ・話を聞くのが好きな私にとって、授業が深く感じられ、とてもよかったです。お金とコミュニケーションの関係は意識したことがなかったため、興味深かったです。来年、先生の講座をとってみようかな…と思いました。
- ・自分の特性等を知る事が出来なかな面白授業だなと思いました。そしてお金にはかえられない大切なものを改めて考えさせられて、これまで以上に、お友達や、家族等に思いやりの心一杯で接していきたいと思いました。

トライ 第10回 1月26日(水) テーマ 「韓国から日本に留学して 大学について・アリランの替歌を作ってみる」

韓国からの留学生マヤ(鄭信智)さん・友人の大学生平山妙子さん・澤入友美さん

アリラン 『替歌』

- わたしを 思って くれてる人は 遠い雪国で 働いている
- あの方は 口がウマイ～ まるめこまれて～ タリラリアア～
- 今年は 花粉が 大量で 大変 大変 鼻かんだ  
ヨン様 ポリ公 やさしそう ヨンジュン ヨンジュン 冬のソナタ
- 夢を 捨てて <sup>い</sup> 生く人は 未来も 見えずに やみの中

感想

- ・今日はトライをやってきて一番楽しかったかもです。お姉さん達がすごくフレンドリーで嬉しかったです。ミニライブも声が力強くてキレイでした。今日は有難うございました。
- ・韓国語の歌をこんな楽しく歌うことができてすごくよかったです。マヤさんの歌声も本当にキレイでよかったです。
- ・いろいろ楽しい時間でした。マヤさんが歌もピアノも上手くてびっくり。でも話題がいつもマヤさん中心だったので、2人がちょっとかわいそうでした。
- ・とても楽しかったです。歌の歌詞を考えるのは少し恥ずかしくて難しかったのですが、みんなの歌詞はおもしろいと思いました。
- ・すごくすごく楽しかったです。きさくに、色々な話をしていただけて、友達同士のようナチュラルなコミュニケーションの場になっていたのがよかったです。アリランは恨みの歌なのに、人の強さをメロディに感じられておもしろかったです。

トライ 第11回 2月9日(水) テーマ 「ブラジルに行って、新発見」

日系社会青年ボランティア 水谷有未子さん

生徒感想

- ・ブラジルについて知っている事はあまりなく、ただ漠然と「自然がたくさんある大きな

国」というようなイメージを持っていましたが、話を聞いていくうちに、自然と文化が混ざり合った国なのだと感じました。

- ・日本の文化が結構浸透しているのが驚きです。  
風景やカーニバルなどの写真がよかったです。
- ・水谷さんは色々な経験をして、とても頼もしく生きている感じがしました。  
写真もたくさん見せて頂き、ありがとうございます。  
普段見ないような写真を見れて、とても新鮮な気持ちになりました！！
- ・アマゾン川がブラジルにあったの知らなかった。  
会社を辞めてJICAに参加してしまったなんて、すごい決意だなあとと思った。

2004年度 トライ コミュニケーション・新発見 2005/2/9

一年の活動を振り返り、生徒自身で自己評価する。

実際に、一年間、講座を受けてみてどうでしたか。(自分なりの成果はありましたか。新しい発見はありましたか。印象的だった取り組みなど。)

- ・色々興味深いお話を聞く事ができたのが、一番の収穫に思います。  
元々コミュニケーションをとる時は、聞き手側なので、自分の知識にもなる人と触れ合う機会として、ずっと入っていく事ができました。  
前半のトライのメンバーとのコミュニケーションは、今思い返すと、ささいな楽しさの連続でした。小さなコミュニケーションしたいという心でも、会話をするうちに大きなコミュニケーションになっていくんだなと感じています。
- ・この講座を一年間受けて、世界中には色々な国があって、色々な人がいて、文化があるのだと知りました。また、その中で働く日本人の話も聞けて、良い経験ができたと思います。
- ・少しでも人見知り直したいと思って受けました。  
積極的でもなければ、何をすればよいのかわからずに、うろうろばかりだった私が講座の中に友達もできて、真っ直ぐに行動出来るようになった事が良かったです。色々な国を見てきた人の話を聞いて、私はニュースとかに出る表面的な“良すぎる事”“悪すぎる事”だけしか知らずに、その国を知ったつもりでいたことが恥ずかしくなりました。  
もう少し顔を上げて視界を広くして生きたいと思います。
- ・色々な国の文化、習慣などを知る事ができて良かったです。
- ・普段では絶対にやらない事や、機会がなければ聞けない話を、このトライを通して、沢山学べたので、私にとって、とても大きな思い出になったと思います。
- ・はじめの頃は知らない人たちと話したり、一緒に何かをすることに少し抵抗があったけど、今では前よりも話したりすることが普通にできるようになってきたので良かったです。  
コミュニケーションは色んなところで必要とされているんだなあと、この授業を通して改めて感じました。
- ・少しだけ自分がデカくなった気がします。
- ・コミュニケーション能力が少し上がったと思いました。

#### 教師自身の成果・課題

マラウイから学び、外部からお呼びしたさまざまな方から刺激を受け、生徒から励まされた授業でした。

平成16年度 教師海外研修(派遣国：マラウイ)実践報告書

1. タイトル：「豊かさと開発と援助：マラウイを通して」
2. 氏名：田中千賀子  
 学校名：光ヶ丘女子高等学校 担当教科：英語、公民（国際事情）
3. 実践教科：国際事情（他の先生から時間をもらって実施） 時間数：4時間（×2クラス）
4. 対象生徒・学年：高校2年生（普通科国際コース） 対象人数：76人（38人×2クラス）
5. カリキュラム案

(1) 実践の目的

- ・ マラウイとアフリカに親しみと興味を持たせる。
- ・ マラウイの豊かさを知り(感じ)、マラウイの貧しさ、問題点についても知らせる。
- ・ マラウイの豊かさと貧しさを踏まえたうえで、「開発」とは何か、さらに「豊かさにつながる開発」とは何かを考えさせる。
- ・ 「開発援助」のあり方を考え、現在の援助の問題点についても知らせる。

(2) 授業の構成案

| 時限・テーマ・ねらい  | 方法・内容   | 使用教材  |
|---|---|---|
| 1時限目<br>テーマ：マラウイクイズ<br>ねらい：導入のためマラウイ・アフリカに興味を持たせる   | (1) マラウイに関するクイズに答える。<br>(2) アフリカの地図を書き、アフリカにある国の名前をできる限り書き出す。<br>*すべてグループワークとし、グループ対抗戦にする。  | ・クイズ(自作)<br>・ボールとシマの写真<br>・サッカーボール(自作)<br>・アフリカの地図と国名                 |
| 2時間目<br>テーマ：マラウイの豊かさ・貧しさ・日本との違い<br>ねらい：写真からマラウイの豊かさを感じ、貧しさと日本との違いについて知らせる                       | (1) 各グループに3枚の写真(大人、子供、景色の写真)を配り、「豊かだな、いいな」「貧しくて困るな」「日本と違うな」と思うところを話し合ってから書き出す。<br>(2) 全体で出た項目を発表しあう。<br>(3) 出た項目について話を広げ、また、新たな写真を見せながら、マラウイの人々の生活や豊かさ、貧しさ、JICAの援助などについて知らせる。   | ・マラウイで撮った写真   |
| 3時間目<br>テーマ：「開発」とは、「豊かさにつながる開発」とは何か。<br>ねらい：経済などの発展は心の豊かさを減らす、ニーズを満たすことにつながる開発は豊かさにつながることに気づかせる | (1) developing country であるマラウイが developed country になるためには「何がどう変わることが必要で、その変化をどのように起こすか」をグループで考える。<br>(2) 出た意見を全体で共有し、「このような変化が起こると、マラウイの豊かさはどうなるか」を考える。<br>(3) 「豊かさは減る」という意見が圧倒的なので、「豊かさにつながる開発」はどんなものかを考える。<br>(4) 意見を共有した後、「開発」と「持続可能な開発」の定義を提示し、「ニーズ」を満たすための開発は必要だが、「欲」に走ると「心の豊かさ」が減ること、その国に合った開発のあり方があることを確認する。 | ・2時間目が出た「豊かさ・貧しさ・違い」をまとめた資料<br>・「開発」や「持続可能な開発」の定義を調べる(アマルティアセンの定義を使用) |
| 4時間目<br>テーマ：開発援助のあり方<br>ねらい：援助が個人や社会に与える影響について認識を深め、望ましい援助のあり方を考える                              | (1) 援助には政府ベースと民間ベースのものがあることを伝える。<br>(2) 4つのケースについて援助のメリット・デメリットを個人で考えた後、グループでその援助をしようかを考慮する。<br>(3) 全体で意見を交換したのち、実際その援助を行ったためどのような影響が出たかを知らせる。<br>(4) 「援助産業」という言葉の意味を考えさせ、教える。<br>(5) 望ましい援助のあり方を考える。   | ・4つのケースを書いたプリント(自作)   |

☆授業の詳細☆

1 時間目(1 時間目と 2 時間目は連続で実施)

A. 教材

- ・ マラウイクイズ(自作)
- ・ マラウイで撮った写真
- ・ 自作のマラウイ式サッカーボール

<マラウイクイズの内容>

\*グループワークで使用。答えを紙に書かせ、一斉に出させる。正解 1 問につき 1 点でグループごとに点をつける。一番点を取ったチームが優勝。拍手!

1. マラウイの面積は日本の約 3 分の 1 (北海道と九州をあわせた程度)。では、人口は日本と比べてどの程度?

- ① 2 倍    ② 同じ    ③ 5 分の 1    ④ 12 分の 1    (正解④)

2. マラウイはアフリカにあります。アフリカの地図を書きマラウイの位置を示してください。

3. マラウイの言葉は「チェチェワ語」です。よく聞いた言葉に「ムリバンジ」と言う言葉がありました。意味は何でしょう。

- ① ありがとう    ② こんにちは    ③ さようなら    ④ 主食の食べ物の名前    (正解②)

4. 主食は「シマ」といいます。(写真を見せて作り方を説明)何からできているでしょう。

- ① お米    ② 小麦    ③ とうもろこし    ④ いも    (正解③)

5. (サッカーボールの写真を見せ)これはなんですか?サッカーボールですね。何から作っているでしょう。考えて書きなさい。(選択肢なし、正解:ビニールあるいは布、正解の出た後で自作のボールを触らせる)

6. 最後の問題です。アフリカには国がいくつありますか。53 ですね(西サハラを入れると 54)。国の名前を書き出してください。(ひとつにつき 1 点)

B. 授業の進行

クイズの内容を行った後で正解数を集計。優勝グループにみんなで拍手。

2 時間目

A. 教材

・ マラウイで撮った写真各グループ 3 枚。(子供の写った写真、大人の写った写真、景色の写った写真;できるだけ鮮やかな写真を使用)

B. 授業の進行

1. 4 人程度のグループを作り、各グループに写真を配る。

2. グループで写真を見て「豊かだな・いいな」「貧しいな・困るな」「日本と違うな」と思うところを紙に書き出す。

3. 出た項目を全体で共有。

4. 出た項目に関連させて、マラウイの人々の生活や社会背景、JICAの援助などについて話す。新たに写真を見せて補足したいことも話す。

<話した主な内容>

自然の豊かさ、人々の力強さ、人が楽しそうだったこと、助け合いが必要な社会であり人のつながり(特に親戚)が強いこと、ものがないので平和であること、ものがないので感謝の気持ちが強いこと、工夫をよくすること、平均的衣食住のようす、学校の様子、産業は農業中心で学校に行かない子も多いこと、電化率4%について、平均寿命とマラリア・エイズなどについて、女性の地位の低さについて、多くの男性が不安定な生活をしていること、多くの女性がよく働くこと、JICAの人たちがどのような援助をしているか、野生動物はいない(公園の中にいる)こと

3 時間目

A. 教材

・前回の授業で出た「マラウイの豊かさ・貧しさ・日本との違い」をまとめたもの

B. 授業の進行

1. 「マラウイの豊かさ・貧しさ・日本との違い」を配布、前回の授業を簡単に振り返る。
2. 「開発とは何か」を考えるために、developing(開発中) country であるマラウイが、developed(開発の完了した) country になるためには、(すなわちマラウイの開発が進むためには)「マラウイの何がどんな風に変わればよいか」をグループで考えて模造紙(裏紙)に書き出す。
3. いくつか書き出せたら、その変化をどのように起こすか、方法を考えて赤色で書き加える。
4. 各グループの模造紙を張り出して、出た意見を全体で共有。わかりにくいものはグループに説明してもらう。
5. 「このような変化が起こったら、マラウイの豊かさはどうなると思う?」とたずねる。
6. 「豊かさがなくなる」「よくなる点もあるけれど、豊かさは減る」と言う意見がたくさん出るので、「豊かさがなくなるような開発はいい開発?」とたずねる。
7. 全体的に「よくない」「いやだ」と言う反応があったので、「豊かさにつながる開発とはどんな開発か」を各グループで考えて全体に発表。

<出た意見>

マラウイにあるものを生かした開発(例:ソーラー利用、農業を発展させる、歌が上手なので、世界に羽ばたく歌手を育てる、マッシュルームハウスのホテルなどを生かした観光業)教育を充実させて、医者、技術者、政治家などを育てる。下水道、灌漑設備などを整備して水を確保。文化を大切にしていってゆっくり開発。自然を保護して工業化は規制つき。汚染物を出さない開発。自給自足できることを第1に考えた開発。欲を教えず見栄を張らないことを教える教育。食べ物を確保でき過労しない程度の労働。開発が進んだら犯罪が増えそうだから今のままでいい。価値観が違うから今のままで(マラウイは)豊かなのでは?

8. 出た意見をまとめる。



9. develop は envelope(封印する)の反意語で、「中にあるものを解き放つこと」、だから「人の開発=人が中に持っているさまざまな力を出せるようにすること」であり、「社会の開発=人がそうできる社会を作ること」すなわち、「衣食住が足りて、基本的人権が守られている社会、平和が大前提」と考えられることを伝える。また、sustainable development(持続可能な開発)という言葉が最近よく使われており、その意味は「次世代のニーズを損なわないように現世代のニーズを満たすこと」である。そして、Needs を満たすための開発は必要であり豊かさにつながるが、Wants(欲)を満たすための開発は、人間の時間をとり、ストレスをためることにともつながるので必ずしも豊かさにはつながらないことを指摘する。

#### 4 時間目

##### A. 教材

- ・ 3 時間目の簡単なまとめを含んだ「開発援助」の学習のためのワークシート(自作)

##### B. 授業の進行

1. 前回の授業の振り返りと援助にはODAと民間ベースがあることを簡単に説明する。
2. ワークシートを使って4つの援助のメリットとデメリットを各自で書く。
3. グループで話し合っ、マラウイの援助計画者になったつもりで、それぞれの援助をするかしないか決める。
4. 全体で各援助をするかしないかを聞き、するグループ、しないグループ、迷っているグループの主張を聞きあう。
5. マラウイでの実態はどうなのか、その援助がどのような事態を招くのかを教える。
6. マラウイで聞いた「援助産業」という言葉の意味をグループで考える。
7. 意見を聞いた後で、援助産業とは「援助が産業、すなわちお金儲けの手段になっていること」を伝え、マラウイの国家予算の4割が援助でマラウイのお金持ちのほとんどが援助に関わっている現状を伝える。
8. 「望ましい援助はどんな援助か」についてグループで話し合ってもらいたかったが時間がなかったので「私の考える望ましい援助」という形で次の5点を伝えて授業を終了。
  1. 1部の人の金儲けにつながる援助はだめ。
  2. 生活を少しずつ向上させる援助。
  3. 現地の人の意思を反映した援助。
  4. 援助は give and take。(2 & 3のような援助なら現地の人と触れ合うので必ず自分も得るものがある。)
  5. 日本のODAは日本の利益につながらないと使えない。この状況は問題あり。

##### C. 生徒の反応・評価

- ・ 各質問に対する生徒の反応は「B. 授業の進行」参照。
- ・ 授業後アンケートを実施。以下はその結果。(合計 68名)

  1. マラウイに興味や親しみをもちましたか。
    - a. とても持った(24名) b.以前より持った(43名) c.全く持たなかった(0名)

2. マラウイの「豊か」なところを感じることはできましたか。  
 a.少し感じる事ができた(30名) b.とても感じた(38名) c.感じなかった(0名)
- 3.「開発」とは何かについて視点が広がったり, 認識が深まったと思いますか。  
 a.思う(64名) b.思わない(2名) c.その他(3名)
- 4.「豊かさにつながる開発」について視点が広がったり, 認識が深まったと思いますか。  
 a.思う(62名) b.思わない(1名) c.その他(4名)
- 5.開発援助が援助される側に与える様々な影響について, 認識が深まったと思いますか。  
 a.思う(65名) b.思わない(2名) c.その他(1名)
- 6.望ましい開発のあり方や援助のあり方について, 以前より深く考えてみたくなりましたか。

- a.なった(39名) b.少しなった(26名) c.かわらない(3名) d.その他(0名)

7. その他授業を受けて思ったことを何でも書いてください。

- ・マラウイには豊かな面がたくさんあることがわかった。うらやましい。
- ・ものがない=貧しい、便利=豊かでないことがよくわかった。
- ・アフリカについて知れてよかった。
- ・授業が楽しかった。
- ・人の意見が聞けてよかったし、こういうやり方はわかりやすかった。
- ・援助について深く、色々考えた。
- ・なんでも開発すればいい訳ではない、開発について色々考えた。
- ・「本当の豊かさ」「本当の幸せ」について考えた。

(以上多数)

- ・援助がその国を貧しくすることがあることを知ってショック。
- ・援助されることについてマラウイの人がどう思っているのかを知りたい。
- ・自分たちが必要と思ってもマラウイの人は必要と思っていないかもしれない。  
(価値観が違う)
- ・富と貧困、の問題は難しいけれど私たちが真剣に取り組んでいかななくてはならない。

#### D. 所感・反省

- ・アンケートでほとんど全員が肯定的なコメントをくれて、嬉しかった。
- ・クイズはいつどのクラスでやっても盛り上がった。(クイズはほかのクラスでも実施。)
- ・2時間目の後半、こちらから一方的に話す時間が少し長くなってしまった。もう少し短くし、質問の時間を取るとよかった。
- ・時間をもっとあれば、4時間目をマラウイ側と援助国側に分けて話し合いをさせると面白かった。
- ・全体的に導入的な内容であり、今後深めていく部分は担当の社会科の先生がやって下さると思う。ほとんどの生徒は学習に積極的で、自分たちの中での話し合いがしっかりできていた。気持ちよく授業ができたのはその先生の力も大きいと思う。
- ・通常の授業でやる以上テストもあり、時間も限られているので、完全な参加型は難しいと思い、最後に結論的な意見があったほうがよい場合もあると思った。

<参考資料>

- 写真はほとんどマラウイチームの鈴木さんと水野さんが撮ってくれたものを使用。
- 3 時間目の「開発＝中にあるものを解き放つこと」の考え方は、池住さんの「ファシリテータ講座」で学んだもの。「持続可能な開発」の定義はアマルティアセンの定義。
- 開発援助の学習のためのワークシート(4つのケース)の内容と解説。

1. 実のよくなるとうもろこしの種(遺伝子組み換え)と肥料を無料で配る。  
→(実際に何年か前日本の財団とどこかのNGOが実施した援助)遺伝子組み換えは種子ができない。また、肥料がないとうまく育たないため土地の質が変わってしまう。配られた年はよかったが、次の年は配られなかったため、以前作っていたとうもろこしもできずに食糧難に陥ってしまった。現在でも種と肥料の配給を約束する政治家が選挙で選ばれる事態を招いている。
2. 繁殖率の高い魚の稚魚を養殖している人に紹介する(あげる)。  
→繁殖率の高い魚を入れてしまうと、生態系のバランスが崩れ土着の魚がだめになってしまうことがある。養殖池に飼っていてもどこからか自然の湖などに入ってしまうので、マラウイでは在来種に近い魚の繁殖率を上げる研究をしている。
3. 野菜の作り方や土(堆肥)の作り方を教える。  
→協力隊員が種を等間隔で植えることを教えただけでも大きな助けになった。堆肥を作るのは根気が要るので、やる気があって続くグループにだけ教えることになる。
4. 電化を進めるためにダムを作る。  
→ダムはその近辺の人の生活を破壊することがあり、注意が必要。(例：インドネシアのコトパンジャンダム)。マラウイで電化を進めると木の伐採を減らす意義がある。

○写真から見るマラウイの豊かさ・貧しさ・日本との違い

(出た意見に田中の意見も加えたもの、出たところに入れたので感覚の違う生徒もいる)

<豊かだな・いいな>

自然が豊か、空気がきれいそう、星がきれい、笑顔がいい・素直、瞳の輝き、楽しそう、顔色がよい、仲がよい、協力し合う、1日が長そう、体格がよい、いじめがなさそう、動物がいる、子供の遊び豊富、森が多い、広大な土地、きれいな服、写真好き、机・教育がある、家がある、子供が多い、自転車がある、汚染物が少ない、おおらか、機能的、感性豊か、人間関係豊か、平和である、歌・作曲がうまい、感謝の気持ち旺盛

<貧しいな・困るな>

- ・ 道路が整備されていない、家がぼろぼろ、服がぼろぼろ、服に流行がない、服が援助物資、靴がない、子供用自転車がない、机・教科書が少ない、筆記用具少ない、教育が行き届いていない、灌漑設備がない、土地がやせている湯だ、作物が枯れている、電気が通っていない、水が汚い、井戸からの水汲みたいへんそう、農業機械内、年土地法の差が大きそう、便利なものがない、子供のおなかが膨らんでいる(栄養失調)

<日本と違う>

- ・ 道路が不正日、車がない、自転車ふるい、地平線が見える、大きな建物がない、電気が通っていない、自然が多い、人工物少ない、動物がいる、肌の色、国場b bが違う、家が平屋、服が機能的、紙が短く天然パーマ、村全体が家族のようだ

平成16年度 教師海外研修 (派遣国：マラウイ) 実践報告書

1. タイトル 日本とは違う文化を知ろう、楽しもう  
 2. 氏名 田邊 愉美子  
 学校名 静岡県立富士養護学校 担当教科 英語  
 3. 実践教科 英語 時間数 5時間  
 4. 対象生徒 高等部1, 2年生 対象人数 4人

\*実践したクラスは身体的な障害と知的障害を併せ持つ生徒のいるクラスで学力も千差万別である。授業は私を含めて教員3人の T.T で行い、生徒の個々の学力に合わせて支援していった。授業時間は各 30 分。

5. カリキュラム案

(1) 実践の目的

- ・日本以外の国があることを知り、マラウイの文化を体験することで視野を広げる。
- ・日本以外の国の文化や人について知りたいという意欲を持たせる。

(2) 授業の構成案

| 時限   | ねらい                                       | 方法・内容  | 使用教材                             |
|------|---|--|----------------------------------|
| 1. 2 | 日本・マラウイの旗を覚える。ゲームを通してマラウイに興味を持たせる。        | (1) 世界地図で日本とマラウイの位置を確認<br>(2) 日本マラウイの旗を確認<br>(3) 太鼓のリズムに合わせて旗上げゲーム                                 | ・世界地図 (国旗付)<br>・日本・マラウイの旗<br>・太鼓 |
| 3. 4 | マラウイでの買い物方法を知り、実際に自分も体験することで、日本とは違う文化を知る。 | (1) マラウイでの買い物の仕方を紹介<br>(2) 「How much ?」と英語で値段を聞く方法を練習<br>(3) 1人ずつマラウイのおみやげを買う体験<br>(4) 買った物を一人ずつ報告 | ・マラウイのおみやげ品<br>・マラウイで使われているお金    |
| 5    | マラウイの音楽を聞き、曲想を感じ取り、身近な楽器を使って演奏し楽しむことができる。 | (1) マラウイの音楽を聞く<br>(2) 好きな楽器を選び、音楽に合わせて演奏する   | ・マラウイで購入したテープやCD<br>・音楽に合う楽器     |

## 授業実践の詳細

## (1) マラウイの旗・日本の旗を覚えよう

授業内容：マラウイから生徒に送った葉書を見せる。これがどこから送られたものか世界地図で確認する。世界地図の周りに国旗のついているものを使用し、生徒が国旗に興味を持ったので「今日は旗の勉強をしよう」と提案した。マラウイの旗と日本の旗を各生徒に配り、どちらがマラウイでどちらが日本の旗か確認した。その後、太鼓のリズムに合わせて「マラウイ上げて、日本上げて、マラウイ下げないで日本を下げる」などとリズム良く生徒に指示を出して、生徒がそれに合わせて旗を上げ下げするようにした。慣れてくると、日本を Japan に変えたり、クイズ方式（「東京ディズニーランドがあるのはどっち?」「英語を話す国はどっち?」などとクイズを出して旗を上げて答えさせる）にしたりして応用した。

生徒の反応：最初の1時間は、マラウイの旗と日本の旗の区別が全くつかず、ゲームが始まってもなかなかついてこれない生徒もいたが、何度も繰り返すうちに笑顔も出てくるようになった。2時間目は「旗上げゲームをもっとやりたい」と生徒側からリクエストがあり、ゲームを始めるとスムーズにゲームができたので少し応用することにした。とても楽しく旗を覚えることが出来たようで、家庭に帰って家族に「Japan, Japan」と勉強したことを伝えたり、「英語は今度は何する?いつ?」と教員に聞いてきたりと、日本以外の国について勉強したいという意欲を持たせることができた。

## (2) マラウイで買い物をしよう

授業内容：マラウイと日本の買い物の仕方の違いを説明する。日本では値段が書いてあるが、マラウイでは「How much?」と聞かなければいけない、使うお金は円ではなくてクワッチャである（クワッチャと発音するのは難しすぎるのでお札を見せてこれを使うことを認識させる）など。1人ずつお金を持ってマラウイのおみやげを買いに出かけ、全員が買い終わったら買ったものをみんなに発表する。

生徒の反応：買い物学習は養護学校の生徒にとって卒業後に非常に役立つことであり、1学期の社会の授業で行ってきたことである。そのため非常に興味を持って授業に取り組むことができた。おみやげ品を選ぶ場面では普段見ないものも並べてあったこともあり、品物に見入ってしまったなかなか選べない場面もあったが、そのような時は「マラウイでは夜になっても電気がつかないから真っ暗になります。お店も閉店しま

す。」などとマラウイの生活も紹介しながら授業を進めていくことで楽しい雰囲気の中で行えた。おみやげ品の中でも生徒達にとって身近な音楽のテープやノート、ピーナツなどが興味を引いたようであった。

### (3) マラウイの音楽を楽しもう

授業内容：マラウイで購入したテープ・CDをかけて全員で聞いてみた。感想を聞き、その後音楽に合わせて好きな楽器を演奏した。

生徒の反応：このクラスでは、毎月一回音楽療法の先生が来て下さり、生徒が好きな楽器を使って先生のピアノに合わせて合奏し、自分の思いを表現する機会がある。そのため、マラウイの音楽に合いそうな太鼓やタンバリンマラカスなどを用意しておく、自分で楽器を選んで曲想を感じ取り、演奏することができた。特に、マラウイで購入した牛の毛皮でできた太鼓に興味を持つ生徒が多く、順番に楽しんだ。体の緊張が強い生徒も、楽器を演奏することでゆるむなど、精神面においてもリラックスさせる効果があったようだ。

### 授業実践を通しての所感・反省点・今後の改善策

・養護学校の生徒は外に出る機会が少なく、視野が狭い生徒も多い。また学力の差も幅広いが、同じクラスで授業を行わなくてはならず、授業を考える上で非常に悩んだ。しかし買い物学習や音楽演奏など、それまでに学習してきたことにマラウイの文化を取り入れて応用することで、生徒は抵抗感を感じずに学習することができ、他国の文化に興味を持つことが出来たように思う。

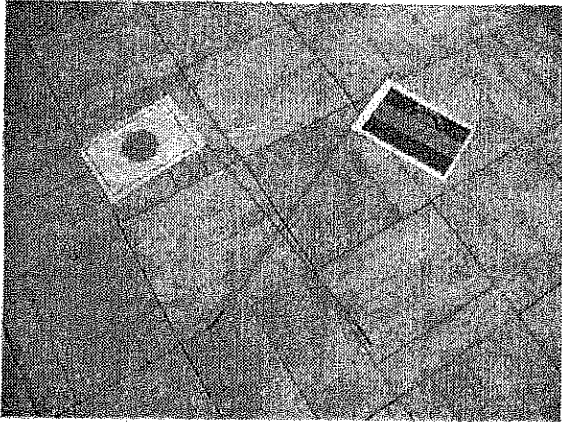
・今回 T.T で授業を行ったが、T.T を組んだ先生方が生徒の実状を非常によく理解しており、授業案を考える段階から意見をいただけたのでよかった。生徒が授業に意欲的に参加し、たのしく学べる環境を設定することが非常に大切であることを改めて感じた。

・生徒の知識・実状から「マラウイに行ったからこそできる授業」というものができなかった。授業の中で自分たちの全く知らないものにも、すでに知り尽くしていることに関しても興味を示さないのがこのクラスの生徒達。日本から外に出たことがない、他国についての知識の少ない生徒にとって、今回「開発教育」という部分で迫っていくのは難しかった。現在は研修交流で養護学校に勤務しているので、「開発教育」という部分に関しては、高校に戻ってから他の先生方の実践例を参考にさせていただきながら実践していきたいと考えている。

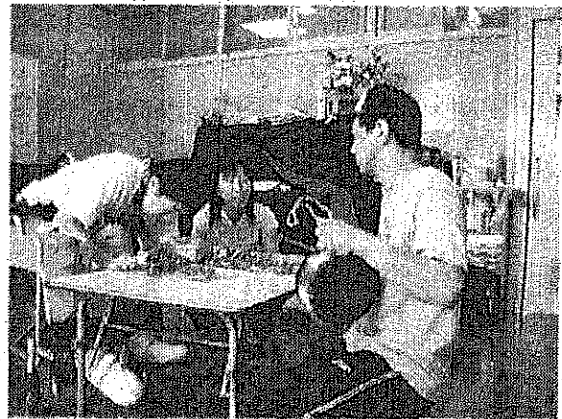
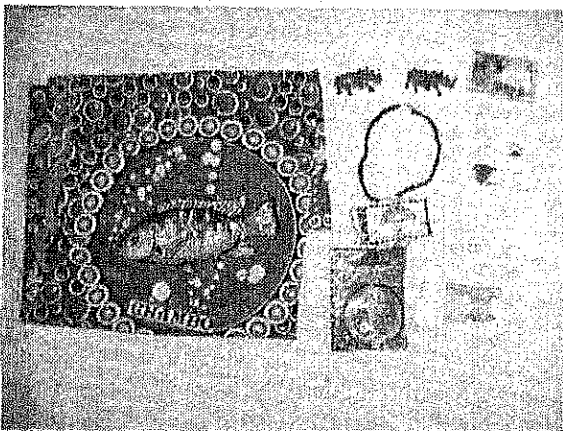
・近隣の高校から月に1回 ALT が来校して授業をして下さるので、これからも生徒達の他国への興味関心が維持できるよう、ゲームや日常生活で役立つことなどを取り入れた英語の授業の工夫を常に行っていけるようにしていきたい。

授業で使った教材

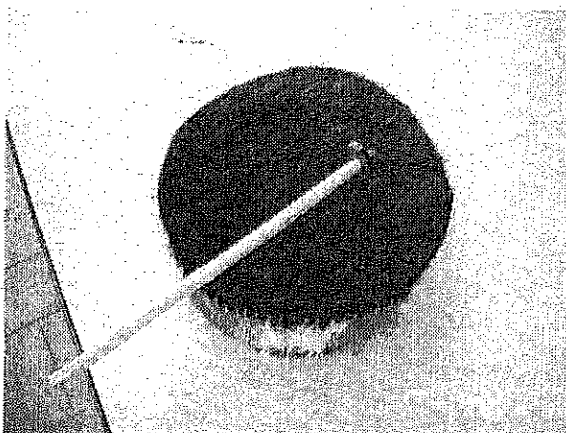
①旗あげゲームで使用。



②「マラウイで買い物をしよう」で使用



③「マラウイの音楽を楽しもう」で使用



1. タイトル 「開発途上国から学ぶ」～マラウイのくらしから
2. 伊勢市立宮川中学校 中津俊彦 担当教科～国語科、総合学習
3. 実践教科～総合学習など 時間数～約10～15時間
4. 対象生徒～中学1年生 約120名
5. カリキュラム案

(1) 実践の目標

開発途上国に生きる人々とそのくらしや開発援助に取り組む人々の活動などを紹介することを通して、今の私たちの生活をあらためて考えると共に、持続可能な人類の近未来の姿と自分たちの役割などについて考えるきっかけとすること

(2) 授業の構成案

| 時限            | 方法・内容  | 教材・料資                              |
|---------------|--|------------------------------------|
| 1             | アフリカ諸国及び開発途上国についての生徒の意識、理解度を知るためにアンケートを実施                      | アンケート用紙<資料①>                       |
| 2<br>～<br>4   | アフリカの人々のくらしと開発援助の一端を知り、学習への興味関心を喚起するためにビデオと写真などでマラウイの紹介をする     | ビデオ「マラウイの自然と人々のくらし」(自作)<br>マラウイの写真 |
| 5             | くらし体験～運動会で民族衣装チテンジをはおり、頭の上に荷物を載せてリレー競争                         | チテンジ<br>感想用紙 <写真①>                 |
| 6<br>～<br>7   | 調べ学習～アフリカ諸国の実情や開発援助の実際などについて各自で興味を持った国を調べ、発表する                 | JICA資料など<br>生徒作成新聞                 |
| 8             | JICA中部を訪問し、JICAの仕事とその役割等を学習し、開発援助に直接携わっている人達の話の聴き、知識を広め、理解を深める | 「JICA訪問のしおり」<br><写真②>              |
| 9<br>～<br>12  | JICAで学んだことを班で話し合い、開発途上国～開発援助などについて班単位で新聞を作成し、文化祭で展示する          | 生徒作班新聞<写真③>                        |
| 13            | これまでの成果(開発途上国の様子、開発援助の実際等)について文化祭の全校人権集会で全校生徒、保護者に向けて発表する      | 生徒発表シナリオ、写真<br><写真④～><br><資料②>     |
| 14<br>～<br>15 | まとめ～これまでの学習を通して学んだことをもとに持続可能な人類の近未来の姿と自分たちの役割などについて話し合う        |                                    |



## 6. 授業細案

## (1) 導入時 (1時限～5時限)

マラウイでの研修を紹介することを通して、生徒たちが開発途上国の実情や開発援助の実態などに興味・関心を持ち、そこから人類の持続可能な近未来の姿やその中で自分たちの役割等について考えるきっかけをつかむための取り組みを始めるにあたり、まず生徒たちのこれらの問題に対する関心度、理解度などを知るため、以下のような項目でアンケートを実施してみた。〈資料①〉

①知っているアフリカの国名を知っているだけ書いてください。②「アフリカ」と聞いて、頭に思い浮かぶものをできるだけたくさん書いてください。③あなたはアフリカに対してどんなイメージを持っていますか。④アフリカに行ってみたく思いますか。⑤(④の理由) ⑥アフリカと日本はどんな関わりがあると思いますか ⑦今、アフリカではどんな問題がおこっていると思いますか。⑧アフリカに開発途上国が多いのはなぜだと思いますか。

結論から言って、今の中学1年生の段階では、アフリカに対してはほとんど何も知らないと言ってもいい状態であった。①では、正確に6カ国を答えた生徒が最高であり、多くの生徒がエジプト、ケニアを知っている程度であった。②③の項目については、生徒が持つイメージは二極化し、野生の王国的イメージと飢餓、貧困、内乱などのマイナス的イメージや偏見をもつものにと大きく分かれた。このような現状であり⑥～⑧の設問にきちんと答えられる生徒はほとんどなく、社会科の地理分野でもほとんど扱われることがなくなったアフリカは、生徒たちにとっても未知の大陸であり、そこに住む人々のくらしや日本との関係、開発援助の実状などは自分たちの生活にとって何の関係もないと考えているような印象を受け、まず生徒たちにアフリカの国々について興味・関心を喚起させることから始めていくことにした。

2～4時限でマラウイで撮ってきたビデオや写真などを見せながら、教師が心を動かされたことを話し、生徒の質問に答えたりする中で生徒たちは、アフリカの人々の衣食住に興味を持ちはじめ、その中でも生徒たちが一番興味を示した頭の上に荷物を載せて歩く生活スタイルを運動会でチテンジをはおりリレーの形式にして体験させてみた。

## (2) 調べ学習と発表、そしてJICA中部訪問

その後社会科とも連携し、生徒たちが興味を持ったアフリカの国々について、図書館、インターネットなどを利用して調べ学習し、簡単な新聞を作成した。

その新聞には日本の開発援助にかかわる内容が多く書かれてあり、次のJICA訪問での予備知識を得ることができた。

10月27日のJICA中部への訪問(写真②)では、アフリカの開発援助のみならず、現在の世界情勢から開発途国の人々のくらし、開発援助の目的や仕組みとJICAの役割、世界各国の開発援助の様子などを多くの職員や青年協力隊OBの方々から説明していただき、生徒たちにとっては、より幅広い国際理解に大いに役に立った。その成果はその後、本校文化祭で発表、掲示した生徒たちの国際理解、開発援助に関する班新聞などからみてとれる。〈写真③〉

## (3) 文化祭で成果を発表

11月10日の本校文化祭における人権集会において、これまでの学習の成果を全校生徒や保護者、地域の人々に向けて発表した。各クラスの班長を中心にしたこの取り組みのプロジェクトチームが作成した当日のシナリオは、写真50枚から成り、マラウイの写真を中心に、開発途上国のくらしや、日本の開発援助についての様子などを紹介するものであった。以下がそのシナリオの一部である。太字は写真の説明。〈資料②〉

1. 国際理解—「いまから1年生の総合学習の発表を行います。」
2. 開発途上国—「・・・世界の人権問題や世界や開発途上国が抱える問題、私達のくらしや未来の社会などをみんなと一緒に考えたいと思います。・・・」
3. **63億、50億**—「・・・世界の人口63億人のうちアフリカ、アジア、南米など開発途上国にくらしている人々は全体の80%にあたる約50億人です。」
4. 生徒の新聞—「・・・開発途上国について調べ、話し合いをしました。・・・」
5. JICA建物—「・・・JICA中部を訪問しました。その報告をします。・・・」
- 6~11 — (JICAでの研修風景〈写真②〉、JICAの役割仕事や海外青年協力隊などの説明、協力隊員経験者の話、館内見学等)
12. **6億人**—「開発途上国でくらす人々のうち今日の食物さえない人達の数です」
13. **4万人、28万人、120万人、1500万人**—「・・・毎日4万人以上の人々が貧しさや食べ物がないために亡くなっています。一週間で28万人、一ヶ月で120万人、一年間で1500万人、そなどその90%が子供たちです。・・・」
14. 食糧難—「・・・世界人口の20%の『先進国』といわれる国の人達が、世界の食糧の約70%を消費してしまい、その約30%が残飯として捨てられていると言われています。食糧難とは食糧の分け方の問題でもあるのです。・・・」
15. **マラウイ**—「・・・開発途上国の中から、アフリカのマラウイを例にとり、そこに住む人々の暮らしと開発援助の様子を見てもらいます。・・・」
16. **マラウイの家**—(マラウイ共和国の概要の説明)〈写真④〉
17. **マラウイの人々**—「・・・世界の国々の中でも最も経済的に貧しいと言われているこの国の電気の普及率は約3%で一般家庭にはほとんど電気はありません・・・」
18. **マラウイの子供たち**—「・・・子供たちはとても人なつっこくて明るく元気です。子供が手に持っているのはゴミを集めて作った手作りのボールです。」〈写真⑤〉
- 19~23. **裸足の子供たち**—(マラウイの子供達のくらしの一部を紹介~★ほとんどの子供たちが裸足で生活、破傷風などで死んでいく子供たちも・・・★各国からの支援物資である服を安く買ったものそれが彼らの唯一の持ち物、その服も約4ヶ月でボロボロになる。乾期には洗濯もできないが、汚れていても気にしない。★食糧難は深刻で普通一日一食か二日に一食、絶対に食べ物を粗末にせず、お皿がきれいになるまでなめるようにして食べる。★いつも栄養失調状態でそのために風邪を引いたり下痢をただけで死んでいく子供もいる。マラリアやエイズも深刻。★大人と同じように一日10時間以上重労働をする子供たちもいる。それでも賃金は一日日本円で50円くらい。〈写真⑥〉数枚の写真で説明

- 24. お手伝い**—「・・・そんな生活の中でも、子供たちは元気で歩く、生きていくために農作業や家の手伝いをよくします。・・・」〈写真⑦〉
- 25. 子守り**—「働いている母親の代わりに幼い弟や妹の面倒もよくみます」〈写真⑧〉
- 26. 水運び**—「・・・子供でも長い距離を歩いて水や食糧を運びます。頭の上に荷物を載せて運ぶ難しさを私達も運動会で体験してみました。バランスをとるのがとても難しいです。・・・」〈写真①〉
- 27～32. 学校**（マラウイの学校の様子を紹介★低い就学率、更に低い中等教育への進学率★暗い教室、一クラス約200人、一人にひとつ机や椅子がない★表面がボコボコの黒板、短くなったチョーク、教科書、鉛筆やノートを持っていない生徒もたくさんいることなどを数枚の写真で説明）〈写真⑨〉
- 33. 生徒たち**—「・・・それでも先生の言うことには必死で耳を傾け、・・・今度いつ勉強できるかわからないからと、必死で学びます。・・・」
- 34. 生徒たちの夢**—「・・・その生徒たちの夢は、“本が読みたい。”“紙とペンがほしい。”“お腹いっぱい食べたい。”“テレビがみたい”中には“大人になるまでいきたい”と言う生徒までいるそうです。・・・」
- 35～41. 十分に教育が受けられない理由**（★近くに学校がない（マラウイでは毎日20km以上も歩いて学校に通う生徒がいる）★先生が少ない★教材、教科書、文房具が揃っていない★学校に行くお金がない★子供は労働力★宗教的・慣習的に親が反対（特に女性）など開発途上国共通の低就学率の理由をマラウイの学校や児童生徒たちの写真と共に説明）
- 42. 働く女性たち**—「・・・この国では大人も子供たちも、みんなが毎日生きるために必死で働いています。家族・親・兄弟・友達をととても大切にします。小さい頃から家の仕事や親の手伝いをよくします。・・・」〈写真⑩〉
- 43. 笑顔**—「ほら、この笑顔を見てください。この子供たちはかわいそうですか？不幸でしょうか？では、私達は幸せですか？それとも・・・」〈写真⑪〉
- 44. 海外青年協力隊**—「この国でも日本から沢山の海外青年協力隊が派遣されていて、電気、ガス、水道なども整っていない生活の中、エイズやマラリアの脅威に負けず、農業技術指導や栄養指導、学校の先生や医療活動などさまざまな分野で活動しています。・・・」〈写真⑫〉
- 45. 協力隊**—「JICAはこれまで世界79カ国、のべ24000人もの協力隊員を派遣しています。その中には本校の卒業生もいます。・・・」
- 46. 国際協力50周年**—「日本はかつて世界で2番目に多く国際援助を受ける国でした。日本が第2次世界大戦後から今日まで、こんな経済的に豊かな国になれたのは、諸外国からの援助があったからです。日本が途上国開発援助をするのはその恩返しでもあるのです。でもそれだけではありません・・・」
- 47. 繋がる世界**—「開発援助は日本の平和と安定のためになくてはならないものなのです。今、世界はいろいろなところで繋がっています。私達の生活の中にも開発途上国から輸入されたものがたくさんあります。特に食べ物、開発途上国からの食料の輸入がなかったら私達の食卓は成り立ちません。それどころか、日本の人口の半分以上の人が飢えてしまいます。・・・」

**48. マラウイの人々** —「・・・ 国際協力は恩返しや人道的観点からだけでありません。

“貧しい国”も“富める国”も世界中みんなが支え合っていかなければ人類の未来はないことを私達は忘れてはなりません。・・・」

**49. 子供たちの笑顔** —「・・・“貧しい国”の貧しさや食糧難の問題は非常に大きくて深く、今何かしたところで、すぐに何かが変わるといったような簡単な問題ではありません。でも、まず世界の現実を知って、そして自分たちの今の生活を見直すなかで、一人ひとりが自分にできることは何かを考えていけば少しずつ世界は変わっていくと思います。・・・」

**50. 地球** — 「・・・これで1年生の人権発表を終わります。・・・」

#### 7. まとめの授業と生徒の感想及び所感、反省点、そしてこれから・・・

一連の取り組みの中から、生徒のアフリカや発展途上国への興味・関心が少しずつ高まっていき、生徒たちの中に、より広く世界を見つめる眼が育ち始めていくのを感じることができた。今回のまとめとして、『人類の近未来と私たちの暮らし』『人としての幸せとは？』といったテーマで話し合いを行った中で、生徒たちから「アフリカの子どもたちの笑顔を見て、貧しいことは決して不幸なことではないことがわかった。」「経済的に恵まれていることがイコール幸せではない。」「本当に大切なモノは絶対に物じゃない。アフリカの子どもたちのあの笑顔だ。」「私たちは井の中の蛙だ。もっと広く世界を見て、私たちの生活を見直し、ムダをなくしていかないと人類の未来はない。」「アフリカの人達が自分たちが作った物が食べられずに飢えて苦しんでいるのに、その食べ物を私たちが粗末にしているということは、もしかすると私たちが近い将来食べ物がなくて苦しむときが来るような気がする。」「開発途上国から学ばなければならないことがまだまだあるような気がする・・・」「自分も青年海外協力隊員になってアフリカに行きたい」等々こちらが今後の取り組みを更に深めていくために用意していた思いを代弁するような意見や感想まで聞くことができた。アフリカは野生の王国でありそこに住んでいる人々のくらしや私たちとのつながりなどを考えることがなかった生徒たち、アフリカといえば、貧困、飢餓、難民、紛争などマイナスイメージでしかみていなかった生徒たちが、アフリカから、アフリカの人々から何かを学び取ろうとしていることは一定の成果と呼べるかもしれない。

しかし、生徒たちのこれらの思いを今後、自分たちの生活の中にどう位置づけ、自分たちのくらしをどう変えていき、それをそれぞれがどのように「生きる力」の糧と成しえていくのかという大きな課題がまだ残されている。また、一人ひとりが開発途上国が抱える問題を、自分も含めた人類共通の課題として考えるようになるためには、まだまだ多くの道のりを経なければならない。しかし、人類が21世紀を生き延びていくためには、また持続可能な人間社会を築きあげていくためには、21世紀の主人公である今の子どもたちにその希望を託さなければならない。

子どもたちは、ほんの少しのきっかけでより広く世界を見つめる眼が大きく見開かれる。そんな子どもたちの可能性をもっともっと引き出していけるような開発教育のあり方を今後も模索、追求していきたいと考えている。

国際理解学習～アフリカ編

名前 ( )

◎以下の質問は、何も見ずに、相談せずに、書いて下さい。

なお、できなくても、何のデメリットもありません。ご心配なく！

(1)あなたが知っているアフリカの国名を知っているだけ書いて下さい。

(6)アフリカの国々と日本とはどんなかわりがあると思いますか

(2)あなたが「アフリカ」と聞いて、頭におもいうろものがもてきてるだけ書いて下さい。

(言葉を書かなくてもいいです)

(テレビや本などで見たものでかまいません)

(3)あなたはアフリカに対してどんなイメージを持っていますか。

いろいろ書いてみて下さい。(ことばをならべただけでもいいです)

(5) (4)の理由を簡単にわかりやすく書いて下さい。

(7)アフリカの国々から日本にはどんなものが輸入されていると思いますか。

(8)今、アフリカではどんな問題がおこっていると思いますか。

(9)アフリカに開発途上国が多いのはなぜだと思いますか。

想像してみてください。

(10) アフリカのことについておぼろげに知っていることがあれば書いて下さい。

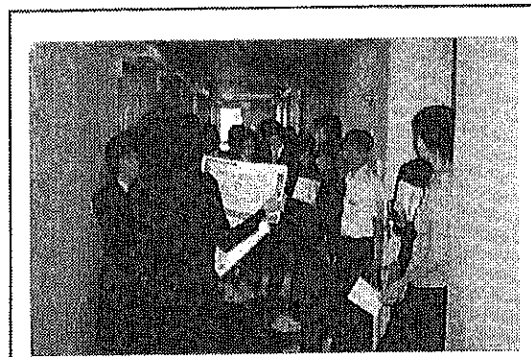
(4)あなたはアフリカに行ってみたいと思いますか。(○をつける)

ア. 行きたい イ. 行きたくない ウ. どちらでもよい エ. わからない

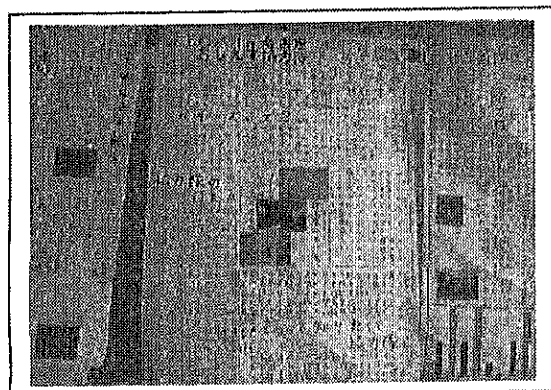
資料写真 ①～⑫



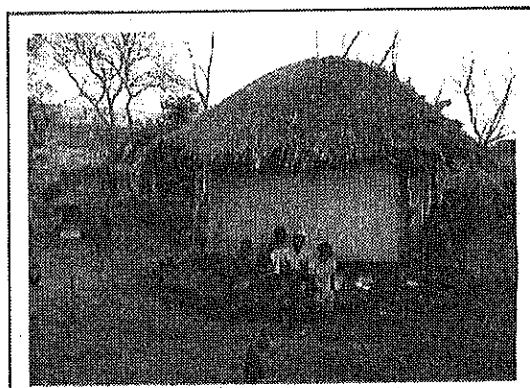
写真① 暮らし体験～運動会にて



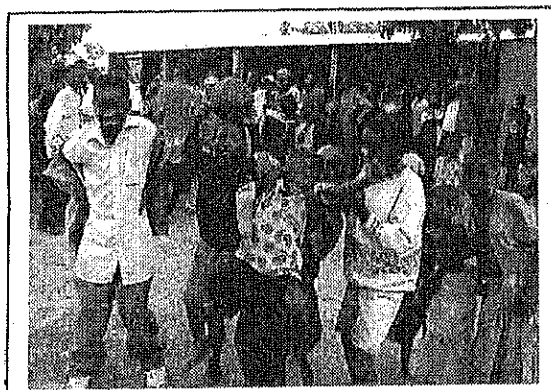
写真② JICAで研修



写真③ 生徒作品新聞～文化祭にて



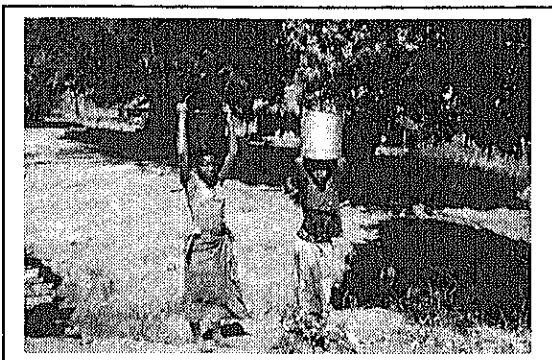
写真④ マラウイの民家にて



写真⑤ 子どもたち～手作りボール



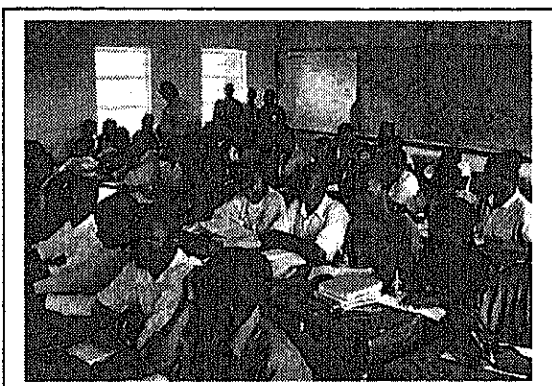
写真⑥ 裸足の子どもたち



写真⑦ お手伝い～水運び



写真⑧お手伝い～子守り



写真⑨マラウイの学校にて



写真⑩働く女性～ため池掘り



写真⑪マラウイの子どもたちの笑顔



写真⑫マラウイの海外青年協力隊